

三重大学病院がロボット支援下で子宮体がんにおける子宮全摘出と傍大動脈リンパ節郭清の同時手術に成功

三重大学医学部附属病院の産科婦人科が、このほど、ロボット支援下での「子宮体がんの子宮全摘出と傍大動脈リンパ節郭清の同時手術」に成功した。国内での実施例が少ないこの術式での複数の成功事例であり、患者負担を軽減できる手術の保険収載にむけ前進した。

国内の子宮がんの罹患数は、年間約2万5200例（地域がん登録全国推計値2012年）、死亡数は約6400人（人口動態統計2014年）と報告されており、このうち子宮体がんは、約1万3600例と子宮がん全体の半数以上を占め、死亡数は約2200人と増えている。



執刀した近藤英司医師

年々、罹患患者数は増加傾向

向にあり、食事の欧米化、肥満、糖尿病患者の増加などがその要因と考えられている。

「子宮体癌治療ガイドライン」では、子宮体がんのステージII期、II期で手術による治療が期待できる場合、子宮・卵巣・卵管の全摘出、および傍大動脈リンパ節郭清の外科療法を行うことを推奨している。しかし、同手術を同時に行う場合には、開腹により実施することが規定されている。近年では、開腹よりも身体への負担が少ない腹腔鏡を用いた傍大動脈リンパ節郭清も保険適用となっているが、子宮などの摘出手術とは分けて行うこととされており、患者は2度にわたって手術を受ける必要がある。

術を同時に行う場合には、開腹により実施することが規定されている。

近年では、開腹よりも身体への負担が少ない腹腔鏡を用いた傍大動脈リンパ節郭清も保険適用となっているが、子宮などの摘出手術とは分けて行うこととされており、患者は2度にわたって手術を受ける必要がある。

同産科婦人科では、2021年11月から2022年3月末までに、子宮体がんに対するロボットを使った手術

患者負担を軽減。手術の保険収載に向け前進

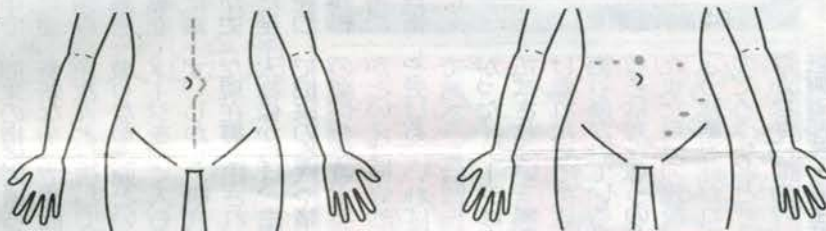
び卵巣・卵管の全摘出・傍大動脈リンパ節郭清・骨盤リンパ切郭清（場合により大網膜切除）を一度で実施する手術を3例実施し、その全てで成功した。

また、同手術は、国内でも実施例が少なく、さらに身体的負担が少ない経後腹膜アプローチ（患者が横向きになり、身体の後方から皮膚を切開して手術を行う術式。大動脈・下大静脈が見やすく郭清をスムーズに進められ、内臓の損傷リスクが少なく早期に食事を再開できるなどのメリットがあるが、より高い技術を必要とする）により実施された。同手術は、まもなく保険収載が進められる見込み。

同病院産科婦人科では、今回の手術を執刀した近藤英司医師をはじめ、腹腔鏡下やロボット支援下での子宮がんの根治術で全国有数の実績を持つ術者を有している。

同科は、「ロボット支援下手術は、他の術式に比べて傷口の目立たなさや術後の回復においても優位性が高いことがわかっています。特に患者さんの身体的・社会的・経済的負担を減らせることが期待できるため、この術式を多くの患者さんに提供できる体制を目指しています。」と話している。

手術による開腹手術創の比較



開腹手術

ロボット支援下